

リハビリテーションのヒューマニズムを科学的に考えようとする人の必読の書

リハビリテーション医療の社会経済学 二木 立 (日本福祉大学) 著
上田 敏 (東京大学)

著者の二木立氏については今更紹介は必要ないであろう。都市の第一線病院である代々木病院における十数年の早期リハビリテーションの実践から生まれた「脳卒中の早期リハビリテーション—これからの考え方とすすめ方」(医学書院, 1987)の著者として、都市型リハビリテーションの旗手であることは本誌の読者には周知のことだろうからである。しかし氏にはもう一つの、経済学者としての面があることを知る人はそれよりはやや少なくなるかもしれない。「医療経済学—臨床の視角から」(医学書院, 1985)という名著があるにもかかわらずである。というのも、我々には医者は医者、経済学者は経済学者と、二つのものはまるで違った世界に属するかのよう感じられがちなので、たとえこの2冊の本が並んで立っていたとしても、同名異人のものではあるまいかと考えたくなってしまうからである。ところが二木立氏は映画ではないが「二本立て」を人生のモットーとしている(字面もそっくりなことに御注意)人であり、「脳卒中の早期リハ」の研究の過程で高度の統計学の技法とパソコンの使い方をマスターして、それをただちに医療経済学の研究に役立てるというふうに医学の世界と経済学の世界をいともやすやすと行き来しているという、いまだき珍しいルネッサンス的な「異能の人」なのである。

今回の本にもこのような氏の特

長がいかに発揮されている。全体は大きく3部に分けられており、第1部の「80年代後半の医療改革」は、厚生省が現在おしすすめている「第2次保険・医療改革」、すなわち、医療費抑制を最大のねらいとした医療機関再編成政策の分析と批判にあてられている。特に厚生省の国民医療総合対策本部が1987年6月に出した「中間報告」に対する批判(第3章)と、それに対する三枝潤(匿名、厚生省関係者)氏の批判への反論(第4章)の2編は「中間報告」に対するほとんど唯一の包括的批判と評価されたものであり、非常に読みごたえがある。この「中間報告」は早期リハビリテーションを高く評価する一方で、老人の長期入院の主な原因が脳卒中の患者の長期リハにあるかのごとく、「長期入院の是正」に重点をおいたリハ・マニュアル紹介を打ち出すなど、リハビリテーション関係者には到底無視できない、重要な文書であることは御承知の通りである。

また第1部第5章の「障害老人の在宅ケア—条件と費用効果分析」は、現在リハ医療の上で大きな問題となっている、地域リハ、在宅リハを科学的に考える上で必読の文献である。諸外国の実態調査に基づいて地域リハは病院(施設)リハよりもコストが低いから行うべきなのではなく、生活の質を向上させるからこそ行うべきものであると結論している。この結論にいたるまでの論のはこび方自

体に、今後のリハ医療のシステムを考える上で学ぶべき点が多々あることを強調しておきたい。

第2部は「リハビリテーション医療—理念の発展と経済・経営」であり、第1章「リハにおける自立概念の転換」、第3章「都市一般病院における脳卒中リハ」なども興味深い。本誌の読者にとっては何といっても第4章の「リハ部門の原価計算調査」が、日本ではじめて科学的な方法論に立って行われたリハ医療の原価計算調査として非常に有益であろう。

第3部は「アジア諸国の医療とリハビリテーション」で、従来ほとんど紹介されることのなかったアジアの3か国(シンガポール、マレーシア、インド)のリハの実地調査の報告であり、意外な事実を多数教えられて非常に有益である。特にシンガポールには一度行ってこの目で見たいと思わされるほど、優れた住宅政策や色々の「社会実験」が行われているのが、印象的であった。

全巻を通じて感じられるのは著者のヒューマニズムと科学性に裏付けられた現状批判=改革の精神である。読者としてはもう少し明確な改革のプログラム(具体策の提言)を示してほしい、という気持ちに駆られるところもないではないのだが、あえてそれを自制して、読者自身に考えさせるべく、豊富な材料をよく吟味して提供するというのが著者のよって立つ科学性なのであろう。リハビリテーション医療の本来もっているヒューマニズムと社会性を真剣に考えようとしている人にぜひ読んでもらいたい本である。

(A5, 頁260, 1988, ¥2,400, 勁草書房 刊)